

作文の心得

論文を書くうえで想定される読者は、内容に関心をもちながら、内容について詳しく知っているわけではない人たちです。論文の文章は、分かり易くなければなりません。まあ分かってもらえるだろうと相手にゆだねてはなりません。自分にとって明らかなでも、読み手に伝わるか絶えず吟味してください。自分もまた対象について深く考えるきっかけとなります。以下の項目を意識しながら書くことで、自分にとっても論理が透けて見える文章となります。

心構え

- 他の人が読むことを考える（正確に分かりやすく書こうと努める）
- 一字一句を考えながら書く（曖昧さや不正確さがないか）
- 一度書いたものに満足しない（もっと分かりやすく考えを整理できないか）
- 大げさな言いかたはしない（可能なかぎりひかえめに）
- 間違ったことを書かない（正しいことを書くというよりも）

語の選択

- 漢語は際立たせたい語に（ひらがなはつなぎことばに）
- カタカナ外来語はできるかぎり日本語に（外来語のもとの意味をたしかめる）
- カッコなどの記号はなるべく避ける（引用以外はなるべく文章によって対処）
- 「……的」「……性」を避ける（曖昧さを回避）
- 「… こと」「…もの」を避ける（何であるのかを明示する）
- 「…と書いた」「…と述べた」を避ける（状況を伝える語をもちいる）
- 「…のである」を避ける（無駄な言い回し）

文単位

- 一文をできるかぎり短く（削るか分ける）
- 短い一文のうち多くの情報をつめる（情報密度の高い語をもちいる）
- 主語を見失わない（重文ではとくに主語のブレに注意）
- 受け身をなるべく避ける（行為の主体があいまいになるため）
- カッコおよびダッシュによる挿入は避ける（文章の自然な流れをそこなう）

配列

- 結論をまず述べる（詳細はあとに続く）
- 重要な事柄から述べる（全体から部分へ / 普遍から特殊へ / 一般から事例へ）
- 時間の流れに逆らわない—古いことから新しいことへ（原因から結果へ）
- 整理する（その一つは… もう一つは… / 一方で… 他方で… / 第一に… 第二に… 第三に…）

段落

- 段落を意味のまとまりと考える（3文以上のまとまりをつくる）
- 段落を接続詞から始めない（段落のキーワードから書き出す）
- 述べるなら丁寧に述べる（中途半端に述べるなら削るか注にまわす）
- 同じような内容の箇所は1つにまとめる（一箇所でじっくり論じる）

ワープロ文章作法

下書きの文章を書くときには

1文もしくは1文中の区切りごとに改行を入れてみる

幅の制約のために、簡潔な文を書くことができる

また、文と文とが縦に並ぶので、

それらのつながりを意識でき、筋の通った文章を書くことができる

段落どうしのあいだは1行空けることで、

段落が1つの内容のまとまりであることを意識する

最後に、通常の文章へと体裁を整えることで、文章を見直せる

欧米の都市においては、19世紀から20世紀にかけて鉄やガラスの工業使用が進み、

生活の場はしだいに重々しい壁から解放される

それにともない、20世紀の近代デザインでは、

物の存在としての量塊のみならず、物の不在としての空間にたいして意識がゆきとどくようになる

近代デザインにおいて空間はもっとも強調された語の一つである

たしかに日本の古い木造建築をみると、

量塊としての重量感がもとから欠落しており、開かれた空間がすでに実現されていたかのようである

とはいえ日本においても、造形思想のうちに空間の語がよく出てくるようになるのは、

1920年代から欧米より近代デザインの考えが持ち込まれて以降である

したがって、日本の近代デザイン運動の文脈では、構成の語とおなじく空間の語もまた、

近代を自覚させるのに役立っただけでなく、伝統を自覚させるのにも役立った

20世紀になって空間論はじつに多様化した

自然科学の内部ではユークリッド空間が相対化され、

人文社会系の学問でも、各分野において空間の語がもちいられ、各種の空間について論じられた

なかでも哲学の議論は、空間とは何かについて反省をうながすかぎり、造形理論にも指針をあたえた

20世紀の哲学のなかでも現象学では、自然科学で想定されてきた均質な抽象空間にたいして、

人間の実感にもとづく個々の具体空間についての考察がなされてきた

すなわち、「客観的空間」「科学的空間」「数学的空間」「幾何学空間」「物理学空間」にたいして、

「生きられている空間」「体験されている空間」を区別しようとする試みである

そしてこうした哲学の議論で問われたのは、

空間と身体との関係であり、空間と知覚との関係であり、空間と気分との関係だった

空間は、身体との関係からすると、自己の周りの広がりである

このとき、自己の周りの広がり、

自己の身体からの広がりの方角と、自己の身体からの広がり範囲によってとらえられる

そのとき、自己の身体からの広がり、たしかに、

上下・前後・左右からなるにしても、三軸六方向はけっして等価ではない

上下は、逆立ちでもしなければ、姿勢を変えてもそのままだが、

前後左右は、姿勢によって変化する

通常の状態では、上方はいくらかでも空いているが、下方はふつう直接何かに支えられている

身体の構造からみて、前方はたいてい意識の向かう方向だが、後方はたいてい意識のおよびにくい方向である

左右はもちろん同じでなく、個人の傾向ならびに社会の慣習によっても異なる質をもつが、

身体の構造からして近いといえる